

研究紹介 *Rhif 13*

Ball, M. & Williams, B. (2001). 'Word-Level Stress' (Part III, Chapter 12). *Welsh Phonetics* [Welsh Studies Vol. 17]. (Lampeter: The Edwin Mellen Press), 165-185.

小池剛史

カムライグ語の語強勢（アクセントとも呼ばれる）は、終わりから二番目の音節（末尾第二音節）に置くというのが定説である。しかし、実際にカムライグ語話者が単語をゆっくり発音しているのを聞くと、後ろから二番目ではなく、一番最後の音節（末尾音節）のところでピッチが高く上がっているように聞こえることが多い¹。色々な録音を聞くと、確かに末尾第二音節が強く発音されているも聞くが、ピッチだけは単語の最後で上がっている。思わず、強勢は末尾音節にあるのではないか、と思わず思ってしまう。しかし、そう考えてしまうのは、我々カムライグ語学習者がカムライグ語の前にまず英語を学んでおり、英単語の強勢の置かれる音節は、ピッチを高めにして発音するように習っているために、カムライグ語の強勢音節も同じようなものと考えてしまうからである。筆者自身もつい最近まで、カムライグ語を朗読する際に、末尾第二音節を高めにして読んでいた。しかし、英語の強勢とカムライグ語の強勢は本質的に違うのだということを教えてくれるのが、Ball & Williams の *Welsh Phonetics* の中の語強勢 'Word-Level Stress' の章である。この章は、カムライグ語の語強勢に関する先行研究をまとめたものであるが、以下にその内容の要点を記す。

1. 強勢の位置

まず語強勢の位置であるが、単音節語の場合は当然その音節に強勢が置かれる。二音節以上から成る語についてはその音節数に関わらず、末尾第二音節に置かれる、というのが一般的規則である

例：イタリック体部分が強勢の置かれる音節の母音。音節の数が増えるに連れて位置が後ろにずれていくのが分かる。

単音節語：dydd 「日」 /di:ð/

2音節語：dyddiau 「日々（複数）」 /dəðjai/

3音節語：dyddiadur 「日記」 /dəðjadir/

¹ University of Wales, Lampeter のカムライグ語学科 (Adran y Gymraeg) で作成した Web 上のカムライグ語⇔英語辞書 (<http://www.geiriadur.net/>) で、いくつかの単語については発音も聞くことが出来る。

4音節語：dyddiadurion「日記（複数）」/,dɛðja'diron/

この規則には例外もある。Cymraeg /kəm'raig/ paratoi/para'toi/のような語は、最終音節が元々二つの音節だったが短縮してしまった、と説明されており（Cymraeg, paratoi）、歴史的に見れば例外ではない。本来的な例外もあり、ym-で始まる動詞では末尾音節に強勢が置かれる場合が多く（例：ymwêl!「（うちに）おいでよ！」）、また ymladd「戦う」：ymládd「疲れる」、ymddwyn「振舞う」：ymddwyn「（子を）産む」のように強勢を末尾音節か末尾第二音節に置くかによって、意味が変わるものもある。また、Caer-で始まる地名（Caerdydd, Caerfyrddin など）も Caer-の後に続く語の方に強勢が置かれる。

上掲の dyddiadurion「日記（複数形）」のように4音節以上から成る語の場合には第一、第二強勢が置かれることがある（音声表記 /,dɛðja'diron/ の ' が第一強勢、, が第二強勢）。また、名詞と形容詞の結びつきで、その統語的結び付きの強さにより、強勢の置き方が異なることも報告されている。

aderyn「鳥」 du「黒い」

aderyn du a'derin 'di:/「黒い鳥」

（単に名詞を形容詞が修飾している場合で、両方の語に第一強勢が置かれている：結びつきが緩い）

aderyn du /a,derin 'di:/「クロウタドリ」（英語の blackbird）

（二つの語が一つの名詞として扱われている場合で、最初の語に第二強勢が、後の語に第一強勢が置かれている：結び付きが強い）

2. 語強勢の音声的特徴

さて、カムライグ語の語強勢の音声的特徴であるが、先行研究をもとに、以下の点が挙げられている。

- (1) ピッチの上昇は、末尾第二音節よりも末尾音節に見られる。
- (2) 末尾第二音節の母音は弱めに発音され、そのために脱落することが多い。
例：eto「再び」→ 'to (wela i chi 'to!「また会おう！」)
yma「ここ」「この」→ 'ma (y llyfr 'ma「この本」)
- (3) また、曖昧な母音で発音されることもある。
例：dangos「見せる」/dangɔs/ → [dɛŋgɔs]：<a>の綴りで表されている母音は本来ははっきりとした母音 /a/で発音されるところが、いわゆる曖昧母音の/ə/ (shwa)で発音されることがある。

- (4) 末尾第二音節の母音よりも、末尾音節の母音の方が長めに発音される。
- (5) 末尾第二音節の後の子音が、より長く発音される。
例：ymladd「戦う」（末尾第二音節に強勢）と ymládd「疲れる」（末尾音節に強勢）では、前者の方が/m/の長さが長い（口を閉じている時間が長い）
- (6) カムライグ語を話さない英語話者を対象にした、単語を耳で聞いて強勢の位置を尋ねる実験では、被験者は一貫して末尾音節と答えた。これは、英語で言うところの強勢、つまりピッチの上昇、長めの母音などが、カムライグ語の単語の末尾音節に見られる、ということである。

少なくとも(1)(2)(3)(4)(6)の点から、カムライグ語の強勢位置と言われる末尾第二音節には、普通我々が考えるような強勢音節の音声的特徴を持っていないという事になる。

3. カムライグ語の強勢音節の特徴

カムライグ語話者が強勢位置を末尾第二音節と捉えるのは、強勢の機能とその捉え方の違いにある。

まずカムライグ語が等時間隔的言語²であるという前提で考える。カムライグ語の発話内の末尾第二音節を強勢音節として脚を捉えた方が、末尾音節を強勢音節とした場合よりも、等時間隔的になるという実験結果がある（前者の場合に、脚の中の音節数が増えれば増えるほど、個々の音節の長さが短くなる）。つまり、末尾第二音節を強勢音節と捉えるのは、その聞こえ方によるのではなく、それがリズム上の単位を作っているためだということである（“the stressedness of the penult in Welsh seems to be due less to its inherent acoustic properties than to its function as the keystone of the rhythmic unit” p.176）。

さらに、2. で既に言及したことであるが、カムライグ語の強勢音節である末尾第二音節の終わりの子音の長さが、そこに強勢があるという標示になっているという点である。

ここで ymladd と ymládd の二つの語を用いた面白い研究が紹介されている。

² Isochronism 等時間隔性「発話(UTTERANCE)の中の強勢(STRESS)のある音節がほぼ等しい間隔で現れる性質のこと。Isochrony ともいう。等時音節性 (ISOSYLLABISM)に対する。」(『現代言語学辞典』(1988 田中春美(編)東京:成美堂 p.323)つまり、強勢音節と強勢音節の間の時間的間隔(=脚)が一定になる性質であり、脚の中に含まれる音節数が少なければその音節は長めに発音され、逆に音節数の多い脚の場合には、音節は短く発音される。

Williams (1985)³によれば、カムライグ語話者に/əmlað/という音連続の/-m-/の部分を徐々に伸ばしたものを聞かせて、ymladd と ymládd のいずれを発音したものかを尋ねたところ、/-m-/ が長ければ長くなるほど ymladd である(つまり末尾第二音節に強勢がある) と判断したということである。つまり、カムライグ語話者は、強勢音節の終わりの子音は長くなるという予測をしているということである (“listeners expected the consonants after a stressed penult to be longer than the average” p.177)。

4. 歴史的背景

末尾第二音節が強勢音節であるにも関わらず末尾音節の方にピッチ上昇があるという奇妙な現象の背景には、「古カムライグ語強勢推移」(The Old Welsh Accent Shift) という歴史的原因があるということが、多くの研究者によって指摘されていると述べている。カムライグ語の歴史が始まるのは、ケルト語の諸方言の一つ、ブラソニック方言(ブリテン島におけるケルト語)が、ケルト語の特徴の一つである名詞類の語形変化語尾を失った時からである、とされている。語形変化語尾が脱落した原因は、ケルト語の末尾第二音節にピッチ上昇を伴う強い強勢が置かれ、末尾音節が弱化したためとある。語形変化語尾の脱落、つまり末尾音節の脱落により、それまでの末尾第二音節が新たな末尾音節となってしまった結果、強勢が(新たな)末尾音節から、(新たな)末尾第二音節に移動したのである。

強勢位置は移動したものの、(新たな)末尾音節におけるピッチ上昇はそのまま残り、新たな末尾第二音節には、ピッチ上昇に代わる別の特徴をもつ強勢が置かれたということである。それは、リズム上の単位を形成するという機能を持った強勢ということであろう。また音節を閉じる子音を伸ばすということも新たな特徴の一つであろう。

本章最後の段落では、カムライグ語には強勢は末尾第二音節にのみあるという見方ではなく、言わば二種類の強勢が共存しているという視点を紹介している。つまり末尾音節のピッチ上昇を伴う強勢と、末尾第二音節のリズム上の強勢、という訳である。Ball & Williams はカムライグ語の古い強勢は、移動してしまっているが、まだ元の位置にあることはあるのである、とまとめている (“It would appear that the ‘old’ accent in Welsh may be superseded, but it is by no means dead” p.185)。

この章を読んで、カムライグ語の文章を朗読する際には、二音節以上の語

³ Williams, B. (1985). ‘Pitch and duration in Welsh stress perception: the implications for intonation’. *Journal of Phonetics*, 13: 381-406.

について、末尾音節のところでピッチを上げて発音しても少なくとも間違えではなさそうである。しかし、末尾第二音節が「リズム上の単位を形成する場所」と捉えられるような母語話者の感覚が身につくようにするにはどうすればよいか？その問いに対する答えは、さらに他の研究を調査する必要がある。しかしそれよりも大切なのは、カムライグ語の発話を自分の耳で何度も聞いて、カムライグ語のリズムというものを身に付けることではないだろうか。